

京大病院 リスクマネージャーのみなさま、こんにちは。9月17日は、**世界患者安全の日**でした。今年度のテーマは、**薬剤安全**です。

医療安全管理室では、そのときの社会のタイムリーな話題を紹介しながら、リスクや安全に関する用語をご紹介します。

今回は、**Medication Reconciliation**をご紹介します。

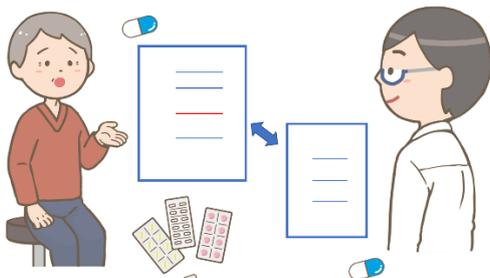
項目：

1. Medication Reconciliation
2. 患者さんとお薬確認

1. Medication Reconciliation

この言葉にふさわしい日本語訳が思いつかないので、まず、英語でご紹介します。YouTubeで medication reconciliation の動画を見てみました。そうすると、医療者（薬剤師や医師）が患者さんとお話され、患者さんにオープンクエスチョンをして、お薬について、語ってもらっている動画が多くできます。

こちらから、飲んでいますか？と聞くと「はい」という回答がかえってくるかもしれませんが、どんな状況が教えてくださいますか、と尋ねることで、飲み忘れていることもあるし、この薬は心配だから飲まなくなった、この薬を飲むと〇〇の症状が出た、などお話されます。また、飲んでいる薬の量を△△mgのものを1回1錠ずつ飲んでいました、など、お話されています。話しやすい雰囲気を作って、お薬の実際の服用状況や懸念事項を伺うということのようです。



Best Possible Medication History (BPMH) 「可能な限り最良の薬歴」
を患者との対話によって作成する

2. 患者さんとお薬確認

病院では入院の際に、薬剤師が患者さんと面談して、お薬の服用状況をお聞きしています。それも medication reconciliation の一部です。でも、入院中の薬剤変更や退院のときにはどうでしょうか。確認が必要なタイミングの都度、薬剤の治療計画について、患者さんと一緒に、文書（正しい情報）に基づいて確認できているでしょうか？

外来から入院、入院中の投薬内容変更、入院から外来等の引き継ぎの場面での再確認が re-conciliation する、という言葉に含まれているように思います。

これは、定められたタイミングでの正式な確認作業であり、患者さんと一緒に薬剤治療計画を確認することが目的のように思います。

世界保健機関の薬剤安全の資料に提示された事例を紹介し

心臓の薬（抗血栓薬含む）を服用していた。

→腰を痛めたので、整形外科を受診し、消炎鎮痛薬を処方された。

→体調不良で病院を受診し、高度の貧血にて入院。

→消化管出血であり、消炎鎮痛薬は中止となった。

→退院後に薬局で薬を受け取った際、消炎鎮痛薬が含まれていた。（医師の言う通り）服用することにした。

→再度、下血をきたして入院となった。

今回の退院時には、患者と一緒に薬について確認した。

お薬を実際に服用するのは、患者さんです。難しいことはわからなくても、自分が何の症状でそれに対して、なぜこの薬が処方されているのかを認識することは、安全な医療につながります。

Reconciliation の英語は、（対立する二者間での）信念や事実について、両者ともうまくいように、道を探っていく**プロセス**のようです。

そのような元の意味も知っていると、この言葉には、患者さんの参加が重要だということが分かりますね。

* 今回は、「**患者さんとお薬確認**」について、お伝えしました *